瀬戸内海域に推定される言語上の東西南北交流

藤　原　与　一

序説

その一　ここには文化論上、瀬戸内海域が問題にされるばあい、研究視圏として、広く関西域ならびに九州がとり立てられることは、多く言うまでもない。瀬戸内海域は、近畿・中国・四国・九州によって瀬戸内海域たらしめられているからである。関西を視れば、そこには、古来の文化中心地の京畿がある。

瀬戸内海論は、すくなくとも関西圏に、その定位がなされるべきものである。

その二　かかる瀬戸内海域は、おのずからして、生活文化全般で、東西南北交流の場所である。

瀬戸内海域の文化論的特性は、注目にあたいする。

一　言語上の東西交流

これが、いちじるしい歴史的事実でありきたったことは、多言を要さないであろう。

古代以降、瀬戸内海域は、一貫して有力な東西舟航路たり得ている。その間、ここに文物の、有形無形の文化の、いかにさかんな東西交流があり得たことか。

言語に、もとより、東西交流のさかんなものがあり得ている。

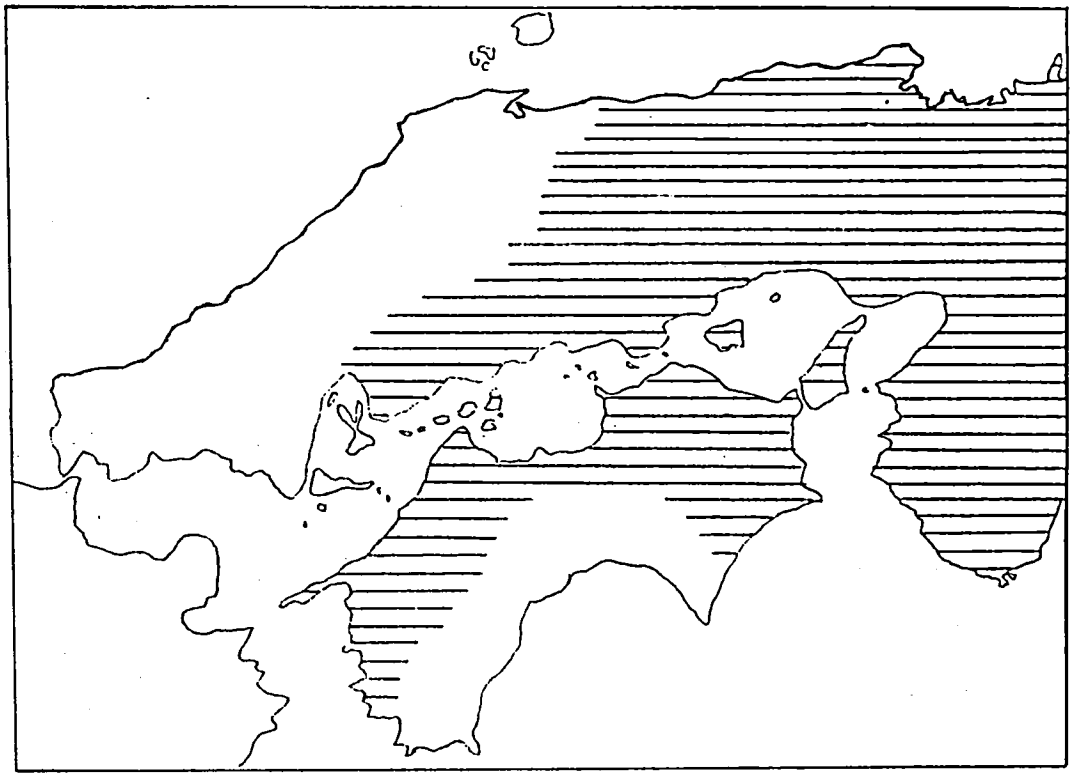
中世以降についてみても、現下の九州南部方言状態は、―特に敬語法状況のごとき―、その、わが中世末中央語（京都中心）の敬語法状況との合致類縁において、よく、中央語の西行流布を示しており、したがって、中間の瀬戸内海域にあっての、言語上の東西交流をよく証している。

以下には、今日の方言状態から逆推して、内海域での、言語上の東西交流を明らかにしてみる。

1　多くは、東から西への伝播流布がとらえられる。

やはり、文化中心地の勢力、中央語の勢力が大である。京都中心の言語勢力は四周に波及し、したがってよく、瀬戸内海域をも西進した。打消助動詞「ザッタ」の遍漫した中への「ナンダ」新勢力の流布は、このさまをよく示すものである。

「そうだ。」などの「ダ」助動詞に対する関西の「ジャ」助動詞に関しては、近世期に、「ヤ」助動詞が発した。発音簡易化また軽易化の音転化であった。これは、「ナンダ」のばあいほどには西漸勢力を発揮してはいない。しかし、四国にはかなりこれが見られ、九州域にも「ヤ」が



「～ ナンダ」の分布（横線じるし）

点在する。（ものがじかにこちらまで伝わったのではないばあいにも、そうした発音におもむく傾向性といったようなものは、東から西に、伝播しているであろうか。）

2　西から東への伝播流布も、なにほどかはありきたったであろう。

さつまいもの「カライモ」「リューキューイモ」「サツマイモ」などの名称は、甘藷そのものの、西から東への流伝どおりに、西から東へと、瀬戸内海域を伝わるところがあったか。「カライモ」は、なかんずく早期に、内海域によく流布した証跡がある。

瀬戸内海の潮流は、満ち汐（上げ汐）となれば、豊予水道から進入する汐も、ひたすら東上する。一備中の真鍋島あたりで、紀淡水道から上がって西流してきた満ち汐と契合する。内海東上の汐は、史上、長い間に、多くの文物を東に運びもしたことであろう。内海言語状態の精密な調査では、方言上のなにほどかの事項の、こうした推移が明らかにされている。

二　言語上の南北交流

いちじくを言う「トーガキ」は、まず、中央（京都中心）から山陽道すじによく西漸したらしい。これが、やがてよく内海域を南下分布したと見られる。

これも調査集約の、「中国四国近畿九州」にわたる分布図に明らかである。

「備後バーバー」と言いならわされてきた「バー」ことばは、

○アガニバー　ユー。

あんなにばかり言ってるわ。（老女　孫女のしつこく物をねだるのに言う。）

などと言いあらわされるものである。これはきれいに南下分布を見せている。―内海の島々を伝い、四国の今治市域方面に達している。今治市のすぐ北の島では「バーイ」とあり、（その北の島には「バー」と「バーイ」とが共存し）、今治市方面は「バーイ」である。四国がわとなって、音が変じた。「～イ」の形をとるのが四国発音である。ところで、今治市域を出はずれると、東にも南にも、「バーイ」なり「バー」なりは聞かれないようである。

腹が痛むことを「ニガル」と言うのは、中国がわ広くである。これが、広島県下の因島や生口島まで南下している。

ところで、四国伊予がわは、腹が痛むことを「クワル」「コワル」と言う。「コワル」は、内海島嶼へ北進している。大三島が「コワル」であり、生口島・因島のうちにも「コワル」がある。

南北交流を思わせて十分なものに、親類を言う「ルイ」の分布がある。興味ぶかいことに、これは、関西域ならびに九州で、山陰内に分布しており、かつ、四国の高知県下に分布している。（関連して、愛媛県下の高知県接境域にも一・二の分布がある。）

こうした対応二分布は、もともと、「ルイ」が中国四国のほぼ全域に分布し得たであろうことを思わせる。―山陽方面や四国北がわは、のちに、新しいものの分布をこうむることになったしだいである。

右の全域分布が中国四国双方にあり得たことは、双方での南北交流の大を認めしめるものにほかなるまい。

三　東西交流と南北交流との相関

東西交流は南北交流をかもし、南北交流はまた東西交流をかもす。当然の理である。

このことは、すでに上来でも言及するところがあった。

瀬戸内海域は、古来、東西・南北、縦横の、文化交渉の場であり得た。

言語のばあいも、もとよりそうである。

それにしても、内海周囲あって、四国域がやや劣勢の地位にあったことは、自明ともされるも

のであろう。四国は、九州島以上に、疎外性の立場にあろうか。

これゆえにまた、言語上でも、四国がよりよく近世・中世の状態を伝承し得てもいることになったか。（「一部のいちじるしいことを見て」ともされることであるか。）

四　言語上の東西南北交流の将来

言語の流動移行は、時代の商品のそれとは、いくらか質を異にするらしい。動くようで、動きにくいところもある。——人のあたま・むねにやどっている言語のふしぎさである。（無形の文化財が、ふしぎな固着力を見せる。）

今後の東西南北交流にあっても、瀬戸内海中心の言語状態が、にわかに平準化することはないであろう。墨絵の、一はけでぬられたような状態になることは、将来、そう近くには、まずないであろう。容易には、そんな状態にはならないであろう。

—交通の利便がどのように発達しようとも。しかもそれがどのように多様化しようとも。

中国と四国、中国と近畿でのアクセント相違なども、めったなことでは、その変差がなくなるものではないように思われる。

交流の作用による成果の観察と、交流の中になお生きていく個性的なものの観察解釈とは、ともに重要ではないか。

ここに、温和の文化史観があってしかるべきであろう。

以　上